

大会会長講演

【会 場】メインホール

2016 年 11 月 19 日（土） 9：35～10：00

発達障害の子どもと親「育ち、育てられ」

講師	篁 倫子	お茶の水女子大学
司会者	漆澤 恭子	植草学園短期大学

※文字通訳あり



【趣旨】

心理臨床に携わるとほぼ同時に発達障害の臨床に関わるようになって云十年。その過程で行ってきた未熟児の長期追跡研究と親のメンタルヘルスと支援に関する実践研究から、本大会テーマにかかる一つの視点を提示したい。

初めに発達上のハイリスク児と言われる早産・極低出生体重で出生した子どもの長期フォローアップ研究について触れる。より早く、より小さく生まれた子どもは、確かに発育・発達に関する問題や発達障害のリスクは高いことを認めた。しかし、個々の事例は、子どもの育ちや生活適応をこれらの周産期要因を

もって予測することは難しい、と語っていた。

一方、専門職や支援者にとって重要なパートナーとなる親のメンタルヘルスが重要であることは言うまでもない。ただし、親は養育者であると同時に、自身の人生を生きている。親を支援するとはどういうことなのだろうか。親のメンタルヘルス・QOLや支援・介入に関する検討からは、母親の精神的疲労度は父親と比べて高く、そのQOLには子育ての負担感だけではなく、経済的要因や夫婦関係などが影響していたことが示された。同時に、親の会、療育、専門機関などのリソースを活用する中で、親は子どもに対するサポートを求めながら、同時に自分自身の成長（育つ）とケアを模索していることが示唆された。支援として、ペアレントトレーニングにストレスマネジメントを取り入れたプログラムを試みたが、その中で確認したことは、子どもへの対応について悩み続けながらも、親自身がエンパワーされたと感じる体験の大切さであった。

人は「育てられ、育つ」という。発達障害の子どもの育つ力も、親の育つ力も大きい。それを支える視点からは「育ち、育てられる」のプロセスが展開される。

【略歴】

篁 倫子（たかむら ともこ） 国立大学法人お茶の水女子大学基幹研究院教授

医学博士。専門は発達臨床心理学。資格は臨床心理士、S.E.N.S.SV。

1981年より東京女子医科大学小児科心理相談員。2004年国立特殊教育総合研究所（当時）病弱教育研究部に着任。主任研究官・室長・総括主任研究官等を経て、2006年より現職。小児科では心身症・神経症、発達障害・神経疾患の心理臨床、並びに極低出生体重児の長期追跡研究に携わる。特別支援教育総合研究所では学習障害のアセスメント、ハイリスク児と発達障害、小児がんの子どもへの心理教育的支援に関する研究を行う。現在は発達障害臨床に関わる臨床心理士養成教育を行う傍ら発達障害児の親のメンタルヘルスと支援等について実践的研究を進める。「LDI-R-LD判断のための調査票」（日本文化科学社）、「学校で活かせるアセスメント」（明治図書）、「子ども期の養育環境とQOL」（金子書房）、「子育て支援ガイドブッカー逆境を乗り越える子育て技術」（金剛出版）等。